

KYOTO & HARVARD

日米こころのハーモニー

ハーバード・京都大学グリークラブ OB
ジョイント・コンサート in 仙台

2013年10月14日(月)

東北大学百周年記念会館
川内 萩ホール

賛助出演 合唱団「萩」

Welcome to our concert

本日はようこそお越しくださいました。ありがとうございます。

両校OBのコラボレーションも今年で24年目となります。これまで、日米交互に京都、東京、ボストン、ニューヨーク、長崎、ハワイ等でコンサートを行なってまいりましたが、このたび初めて仙台にて開催する機会に恵まれました。たいへん嬉しく存じております。

コンサートに先立ち、両校メンバー・家族そろって東北大学災害科学国際研究所で先生のお話を伺ったあと、大震災の記憶もいまだ新しい近郊の地にお邪魔して、自らの目と耳でその実態を確かめてまいりました。私たちがこの日の記憶を胸に刻んでそれぞれのふるさとに持ち帰り、長く語り伝えたいと存じます。

このコンサートは当初から「日米こころのハーモニー」と銘打ってまいりました。本日は会場の皆様とも一緒に、こころのハーモニーを響かせることができれば、そして皆様の中の小さな灯りをひとつでもともすことができれば、私たちにとってこの上のない幸せです。どうか両校OBの「年輪を重ねた歌声」にお耳をお貸しください。

末尾ながら、賛助出演の合唱団「萩」の皆様、ご後援の河北新報社様、本演奏会に初演作を書き下ろしてくださった藤原義久先生、打楽器をご提供いただいたヤマハミュージッククリテイリング様、および本公演にご協力いただいたすべての皆様には厚く御礼申し上げます。



ABOUT US

■京都大学グリークラブについて

創設は1966年。70年安保前夜、キャンパスが不穏な空気に包まれていたころ、純粋に音楽の楽しみだけを求める学生たちによって設立された男声合唱団です。

ちょうどそのころハーバード・グリークラブが世界一周演奏旅行の道すがら日本に立ち寄りました。当時の日本の大学合唱団は教と声帯を頼んで大きな音楽を作ることが主流でしたので、ハーバードの演奏はカルチャーショックでした。KGC 創設メンバーたちも雷に打たれたように感銘を受け、できたばかりのクラブの進むべき道を見出していました。

こうして京大グリーは、バレストリーナ、バッハ、ハイドンなど、当時日本の男声合唱団には思いもよらないレパートリーに取り組むことになるのです。

そのころ部室には「グリーに入ってアメリカへ行く」という紙書きがしてありました。当時は海外へ行くなど、夢のまた夢の時代。資金や受け皿など、何の裏付けもないスローガンでしたが、いつかそのうち実現するかもしれない、団員たちは漠然とそう思っていました。その「アメリカ」とはすなわち「ハーバード」に他ならず、その憧憬はその後も脈々と後輩たちに受け継がれていきました。

創設から四半世紀が過ぎようとするころ、ハーバード留学中のOBの尽力により、両校OBの対話が始まって、1990年春、初めてのジョイント・コンサートが大阪、東京で開催されました。そして92年にはハーバード側の招きにより、第2回コンサートを行おうと、京大OBがボストン、ケンブリッジを訪問する運びとなり、25年前、部室に掲げられた途方もないスローガンはついに成就しました。

交流はその後も続けられ、このたびの仙台で9回目を迎えます。彼らとの交流で得たものは、150年の歴史に裏付けられたクラブと同じ音楽的価値観を共有する喜びでした。これが京大グリークラブの血肉となり、OB会活動の原動力になっているのは紛れもありません。

すべてはあの一枚の紙書きが原点だったのです。



指揮 藤田正浩

京都大学グリークラブ1974年度指揮者。ルネサンスから現代まで数々の合唱を経験。OB会では、第3回(東京・京都)、第6回(米国)、第7回(長崎)、第8回(ハワイ)のハーバードとのジョイント、上海コンサート等で指揮。

■ハーバード・グリークラブについて

日本ではまだ幕末の混乱期1858年の創設。もっとも、ハーバード大学はアメリカ合衆国独立よりも一世紀以上早くに建学されているので、大学の歴史に比べると若いクラブかもしれませんが、それにしてもすでに155年の歴史があります。

そのレパートリーは、ルネサンスの宗教曲や世俗曲に始まり、バロック、ロマン派を経て現代曲までの広範囲に及びます。創設当時はラブソングやフォークソングなど軽い曲をバンジョーに乗せて歌って楽しむグループだったようですが、20世紀に入って、初代指揮者アーチボルド・デイヴィソン博士の指導で西洋古典音楽を追求する姿勢が明確となり、今日のレパートリーの基礎が固められました。

ボストン交響楽団との共演をはじめとして、積極的な対外活動もその頃に始まり、1921年にはフランス政府の招きにより、アメリカの大学合唱団としては初めてヨーロッパ演奏旅行を果たしました。この時の演奏に感銘されてプーランクなどフランスの若き作曲家たちがハーバード・グリークラブに曲を寄せ、それらは今日なおハーバードの大切なレパートリーとして歌い継がれています。

第3代指揮者のエリオット・フォーブス博士の頃、世界各地への演奏旅行活動はさらに活発になり、1961年には日本をはじめとする東アジア、64年には北米、さらに67年には世界一周を果たしました。このとき立ち寄った日本での演奏が京大グリークラブに大きな影響を与えたことは左にも触れました。

フォーブス博士は第1回、第2回のジョイントでタクトを振られ、京大グリークラブにとっても忘れ得ぬ恩人のひとりです。

ハーバード・グリークラブの卒業生は、全米各地に広がり、それぞれ社会の重要なポジションについています。今日も全米から集結したメンバーたちが伝統のハーモニーを聞かせてくれます。

指揮 Dr. Frederic H. Ford

1961年7月ハーバード・グリークラブ東アジア演奏旅行の折、学生指揮者として仙台に来演。翌年海軍に入隊、佐世保基地に3年間駐留。退役後バージニア大学などを歴任して音楽史、楽理の教鞭をとる傍ら合唱



指揮者を務める。その後16年余、高校音楽教諭。ハーバードで修士(芸術学)、ニューヨーク州立大学で修士(芸術学)ならびに博士(音楽史)修得。教職退任後はコンサルタント、講師、伴奏者などを務める。53年ぶりの仙台再訪を大いに喜びとしている。

PROGRAM

エール交換 京都大学 学歌 / Fair Harvard

KGC Stage 京都大学グリークラブ OB 会

- ビクトリアの2つのモテット Tomas.L.Victoria (c1548-1611)
Tenebrae factae sunt (地上は暗闇となりぬ)
Gaudent in caelis (あめに喜び)
- メンデルスゾーン男声合唱曲より F. Mendelssohn (1809-1847)
Der Fruhling naht mit Brausen (春は嵐とともに)
京都大学グリークラブOB会への書き下ろし作品初演
- 京のわらべ唄による組歌『遊びをせんとや』 藤原 義久 (b.1939)
～男声合唱、フルート、打楽器のために～

HGC Stage Harvard Glee Club Alumni Chorus

- O Domine Jesu Christe* (ああ主イエス・キリスト) Melchior Franck (1573-1636)
- Daemon irrepit callidus* (悪魔は言葉巧みに忍び寄る) György Orbán (b.1947)
- Round Around About a Wood* (ぐるっと森をひとまわり) Thomas Morley (1557-1602)
- Der Gang zum Liebchen* (愛する人に至る道) Johannes Brahms (1813-1897)
- Jesus Walked This Lonesome Valley* William Dawson (1899-1990)
(イエスはこの無人の谷を歩んだ)
- The Barcarolle of Koshiki Isle* (甕島舟唄) 福永陽一郎 (1926-1990)
- What Shall We Do With The Drunken Sailor?* Arr. Robert Shaw, Alice Parker
(酔いどれ水夫はいかにせん)

~Intermission~

Guest Stage 賛助出演 合唱団「萩」

- 青葉城恋唄 星間船一作詞 さとう宗幸作曲 岡崎光治編曲
- Beautiful Name* 奈良橋陽子・伊藤アキラ作詞 タケカワユキヒデ作曲 岡崎光治編曲
- 遠くへ行きたい 永 六輔作詞 中村八大作曲 岡崎光治編曲
- 走る海 吉野 弘作詞 広瀬昌平作曲 岡崎光治編曲
- 太陽のひとりごと 尾崎由美作詞・作曲 岡崎光治編曲
- 風のようにうたが流れていた 小田和正作詞・作曲 岡崎光治編曲
- じゃんがら祭り スズキヘキ作詩 岡崎光治作曲

Joint Stage 合同演奏 京都大学グリークラブ OB 会 Harvard Glee Club Alumni Chorus

- グノー「第2ミサ」より *Agnus Dei* (神の子羊) Charle Gounod (1818-1893)
Domine Salvum Fac (主よ救い給え)
- The Seal Lullaby* (アザラシの子守唄) Eric Whitacre (b.1970)
- Ubi caritas* (慈しみと愛のあるところ) Ola Gjeilo (b.1978)
- Tarantella* (タランテラ) Randall Thompson (1899-1984)

K Y O T O

■ビクトリアの2つのモテット

スペイン生まれのビクトリアは、17歳でローマに留学し、その地で活躍しましたが、晩年スペインに戻り、マドリードの修道院の楽長、オルガニストとして生涯を終えました。熱心な聖職者で、当時として珍しく世俗曲を1曲も書かず、宗教曲の作曲に専念したルネサンス期を代表する作曲家の一人です。

“Tenebrae factae sunt”(地上は暗闇となりぬ)

ビクトリアの最高傑作のひとつと言われている「聖週間聖務曲集」(1585年出版)の1曲。キリストが十字架に架けられた時に天地は暗闇になったという受難の場面を描いた作品で、キリストの悲痛な言葉が印象的です。しかし終止音は明るい長調の和音で、暗い成就した安堵感や死後の魂の救済が暗示されているように思われます。

“Gaudent in caelis”(あめに喜び)

前曲での救済が成就し、魂たちの天で遊ぶ喜びが、ラテン語のイントネーション、エコーで効果的に表現されています。

以上2曲、失われたすべての魂を偲んで歌います。

■メンデルスゾーン男声合唱曲より

ドイツ、ハンブルクの裕福な家庭に生まれたメンデルスゾーンは、幼少の頃から音楽的才能を発揮、10才で作曲を始め、20才でバッハのマタイ受難曲の復活演奏を指揮した天才です。彼の作品は、伝統的なヨーロッパ音楽に基礎を置きながら、そこからあふれる美しいメロディーが特徴です。

Der Frühling naht mit Brausen(春は嵐とともに)

角笛の響きを思わせる「だから口覚めよ」のフレーズに、ヨーロッパの厳しく寒い冬が終わり、待ち焦がれた春の訪れの喜びがあふれています。春は再生の季節。東北復興の願いを込めます。

なお、原曲は作品71-2というピアノ伴奏付歌曲ですが、本日は無伴奏男声合唱編曲版を使用します。



作曲家 藤原 義久

東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業した後、バリ国立高等音楽院で作曲を学ぶ。現在、山形大学名誉教授。

主要作品はオペラ「ピエトロの息子」、カンタータ「いのちの樹」、ヴァイオリンの為の

「シャコンヌ」、室内楽の為の「プロアルテの饗宴」など多数。

また、合唱曲としては天台寺門宗総本山園城寺声明による男声合唱「法華懺法」、男声合唱のための「四つの祈りの歌」があり、これらは当OB会も直接演奏のご指導をいただいた。ソプラノ独唱、男声合唱、フルート、マリンバの為の『虫めづる姫君』(『堤中納言物語』より)は京都大学グリークラブが初演。

京都大学グリークラブOB会のための書き下ろし作品初演

■京のわらべ唄による組歌『遊びをせんとや』

～男声合唱、フルート、打楽器のために～

わらべ唄は手まり・鬼遊び・お手玉など遊びの唄、自然現象、年中行事にちなんだ歌などありますが、中でも京のわらべ唄は洗練された歌詞・旋律が特徴です。この組歌は、拍子木を連想させるウッドブロック、和笛のようなフルート、そして今様「遊びをせんとや」のベースソロで始まり、5つの代表的な京のわらべ唄を男声合唱で歌い、最後に「女ひとり」の本歌取りで、「京都左京区百万遍、歌に憑かれた男が…」で締めくくるという構成となっています。

現役グリーが初演した「虫めづる姫君」とこの曲を並べてみると面白い共通点に気がつきます。虫に憑かれた「姫君」、歌に憑かれた「男」どちらも、世間一般からすると、そんなことに夢中になってどないすんねん、変わつとるな、と思われる京大生、そして我々自身の象徴のように思えてなりません。

なお「百万遍」とは、私たちが現役時代に遊びをせんと徘徊した大学近辺の界隈で、もともと百万遍智恵寺というお寺の名前が由来です。

「遊びをせんとや」

後白河法皇がまとめた今様集「楽庵秘抄」の中で最も有名な歌です。

「四方の景色(よものけしき)」

「祇園の二軒茶屋」や「歌の中山」が出てくる京らしい雅な風情のうかがえる手鞠歌の秀作です。

「雪やこんこ」

平安時代起源で、唱歌「雪」の元になった歌です。

「雪花散り花」

古い伝統の香のするわらべ唄の秀作です。

「優女(やしょうめ)」

浄土真宗本願寺八世蓮如上人の作といわれる子守唄で、室町時代の京の町の様子が歌われています。

「丸竹夷(まるたけえびす)」

子供に京の東西の通りを覚えさせるための歌です。

「女ひとり」

デュークエイセス「にほんのうた」の京都編。

なお、本歌は「恋に瘦れたおんな」でした。

門野 満里 (フルート)

大阪芸術大学演奏学科卒業、卒業時に学科賞受賞。同大学院修士課程修了。関西新人演奏会、ヤマハ音楽器演奏会等出演。2002年ハンガリー国際音楽セミナー・マスタークラス修了。フルートを島島明朗、大友太郎、山本恭平、企巨国の各氏に師事。現在、大阪チェンバーオーケストラメンバー。関西を中心に演奏活動中。

山崎 智里 (パーカッション)

山形大学教育学部卒業。愛知県立芸術大学大学院音楽学部打楽器専攻首席卒業。第一回中部打楽器新人演奏会第一位。2006年「Marimba International competition in Linz」でセミ・ファイナル出場。音楽教育を藤原義久、マリンバをロバート・ヴァン・サイス、神谷百子、打楽器を岡田知之、今村三明の各氏に師事。

HARVARD

■ *O Domine Jesu Christe*

(ああ主イエス・キリスト)

メルキオール・フランク (1573-1636) は教会モテットをたくさん残しています。これもそのひとつで、ルネサンス様式のモテットに見られる対位法を忠実に守りながら、さらに初期バロック期の和声的色彩をたっぷり加えた作品です。

■ *Daemon irrepit callidus*

(悪魔は言葉巧みに忍び寄る)

オルバーン・ジュルジュは現代ハンガリー合唱音楽の作曲家で、宗教曲、世俗曲ともに多くの作品があります。その作風は、伝統様式に現代的な和音やジャズをとり込んだり、ときにはユーモラスな、ときにはグロテスクな主人公を登場させたりもします。『悪魔…』は短いながら極めて意欲的な作品。悪魔の狡猾・邪悪な手口とイエスの不動の徳性とがドラマティックに対比されています。勝利するのはイエスですが、音楽的には悪魔の方を中心にして面白く劇的に展開していきます。

■ *Round Around About a Wood*

(ぐるっと森をひとまわり)

1600年代初めのイギリスを代表する作曲家トーマス・モーリーの軽快なマドリガル。典型的な田園詩が主題です。若者が森を歩いていると若い娘に出会います。すると娘はお上品な言葉と調子のいい節回しで、恋人にふられたことを嘆くのでした。

■ *Der Gang zum Liebchen*

(愛する人に至る道)

ロマン派作曲家ヨハネス・ブラームスのリートの合唱版。若者は高まる気持ちを抑えきれぬまま、もどかしく夜の明けるのを待っています。これから恋仇にさらわれた恋人を取り戻しに行こうというのです。いかにもブラームスらしい豊潤なハーモニーに満ちた曲で、合唱がうたう若者の綿々たる恋慕の情が、みずみずしく抒情的なピアノ伴奏でさらに深められています。

■ *Jesus Walked This Lonesome Valley*

(イエスはこの無人の谷を歩んだ)

ウィリアム・ドーソン (1889-1990) はアフリカ系アメリカン音楽の教授、作曲家、トロンボーン奏者、合唱指揮者です。アラバマ州タスキーギ・インステ

イテュートの指揮者在任中、当地の聖歌隊を国際的にも評価の高い合唱団に育成し、1935年にはNYのラジオシティ・ミュージックホールに招かれて、1週間にわたり1日6回の演奏をこなしたのです。ドーソン作品はストレートで強烈なまでに個性的、思わず引き込まれてしまう音楽です。

■ *The Barcarolle of Koshiki Isle*

(鵜島舟唄)

ハーバード・グリークラブ1961年日本ツアーの歓迎レセプションで披露された曲です。その場で楽譜が指揮者エリオット・フォーブスに献呈され、以来ハーバード・グリークラブは折にふれてこれを演奏しています。

■ *What Shall We Do With The Drunken Sailor?*

(酔いどれ水夫はいかにせん)

老帆船が錨をあげてまさに海に出ようとしたそのとき、前夜の酒からいまだ醒めやらぬ船乗りが一人。船長と乗組員が頭を抱えます。歌い継がれたこのシーシャンティ(労働歌の一種)、その源こそ知られていませんが、1800年代はじめにはすでに米国の北東地方で歌われていました。

はて、どうしたものか、と乗組員があれこれ知恵を絞ります。酔いが醒めるまで救命ボートに寝かしておいたらどうや。そうや、ボートの栓を抜いてびしょ濡れにしてやればええ。いやいや、甲板の排水口につっこんでぶっといホースで洗ったれ。いっそ、ロープで足から吊るし上げたら、など妙案続出。ちなみに、かく言う周りの連中だって、まるきりしらふとは限らないのですがね。

Bernard E. Kreger (ピアノ)

ニューヨーク生まれ。4歳よりピアノを始める。エレヌ・バレル夫人に師事。ジュリアード音楽院ピアノコースにも学ぶ。高校在学中 NY タイムズ主催コンクールなどに入賞する一方、合唱の伴奏に手を染める。ハーバードに入学し、いままもピアニストを務めるグリークラブとの半世紀に及ぶ縁が結ばれる。クリーブランド大学医学部進学後はロバート・ショウ指揮クリーブランド交響楽団合唱団に所属。ハーバード・グリークラブおよび同卒業生合唱団と共に世界各地に演奏旅行多数。8回目の来日にして仙台初訪問。内科医、専門は疫学。ボストン大学医学部教授。ハーバード・グリークラブ財団理事。

GUEST

■青葉城恋唄

仙台の美しい情景と切ない恋情を綴った星間船一氏の詞に仙台在住のシンガーソングライター・さとう宗幸さんが曲をつけました。1978年に発売されるや100万枚を超える全国ヒットとなりました。この曲に憧れて東北大にきた学生も多かったのです。

■Beautiful Name

1979年、国際児童年のテーマソングとして作られ、バンド「ゴダイゴ」のヒット曲になりました。作詞は奈良橋陽子さん（英語詞）と伊藤アキラさん（日本語詞）。作曲のタケカワユキヒデさんは岡崎先生とも親交があり、料理上手のマルチ人間とか。

■遠くへ行きたい

NHK総合テレビのバラエティショー「夢であいましょう」の「今月の歌」として1962年に作られ、ジェリー藤尾さんが歌って世に出ました。哀愁に満ちたこの昭和の名曲は、日本国内にとどまらず、旧ソ連、東欧、北欧、中東などでもヒットしました。

■走る海

「暇を知らなかった」時代は「もう帰ってこない」と知った思春期の若者にとって、大人になることは苦しみと悲しみに他なりません。吹雪の中をひたすら排他的に走り続ける冬の海は自分そのもの、と吉野弘さんの作詩は叫びます。

■太陽のひとりごと

数多くのヒット曲を生んできたシンガーソングライター尾崎亜美さん1977年の作品です。波止場にたずむちょっと物憂げな一人の女性。そんな彼女を波止場の威勢のいい掛け声と明るい日差しが包んでいく様子を、ボサノバ風のリズムに乗せて描きます。

■風のようにうたが流れていた

小田和正さんがホストをつとめた同名テレビ番組（2004年10～12月）のテーマ曲。“出会いも別れも知らぬままに、流れる歌を聞いていた。慰められて励まされて、そして夢を見た。”歌は、小田さんの音楽がどのように形作られてきたかを素直に歌います。

■じゃんがら祭り

“じゃんがら”はいわき平地区の郷土芸能。鉦、太鼓を打ち鳴らしながら、新盆を迎えた家などを訪問してまわる隅り念仏です。スズキ・ヘキさんの詞に乗せた岡崎光治先生の作曲は4、3、2拍子と自在に変わりゆくリズムを忠実に再現しています。

■合唱団「救」について

2011年5月20日（金）にカーネギーホールにて開催予定だった「日米合唱祭」に出演すべく2010年6月発足の混声合唱団。岡崎光治先生の音楽に魅せられ、そのご指導を仰いでいます。東日本大震災に一時は渡米を断念しかけたが、「歌うことは生きていることの証」という被災地からの声に決意を新たに、「日米合唱チャリティコンサート」となった同コンサートにて、2400名のNY市民に感銘を与えました。帰国後も、仙台、東京、いわき、と各地で演奏活動を行っています。今年8月には、スペインの支倉常長上陸の地と言われるコリア・デル・リオ市からサンタマリア合唱団とハボン（日本）姓の方々を迎え、「ハボンさんたちと祝う豊長遠征使節400年記念コンサート」を開催しました。



指揮 岡崎 光治

平一中、磐城高校、東北大卒。日本作曲家協議会会員。仙台電子音楽協会代表。NHK仙台放送合唱団音楽監督。宮城県芸術選奨、NHK東北ふるさと賞、宮城県教育文化功労賞、仙台市市政功労者表彰などを受賞。若松紀志子、福井文彦、島崎望、田中信昭、ヘルムート・リリンクの諸氏の教えを頂く。主要作品：オペレッタ「きつねと魚屋」、混声合唱曲「幻の祭」、ミュージカル「炎の迷宮」、「甕丸美し郷」、「大路が辻」、ピアノと3台のシンセサイザーのための「Phantasmagoria-III」、宮城国体のための混声合唱と吹奏楽による「新世紀序曲新しい時の渚から」、「W.K.先生の肖像」など多数。とくにオペラ「曉砂」は2011年度 新国立劇場 地域招聘公演に取り上げられ、高い評価を受ける。

石垣 弘子(ピアノ)

武蔵野音楽大学音楽学部ピアノ専攻卒業。今井紀子、故中根伸也の各氏に師事。イタリア・シエナ・キジアナ音楽院の夏期講習に参加。東京、仙台を中心に大学や一般の合唱団の演奏会、声楽のリサイタルの伴奏、ミュージカルやモダンバレエ、朗読とのコラボレーション、演劇祭など、各地での様々なコンサートや企画に出演。

J O I N T

■グノー「第2ミサ」より

グノー(1818-1893)は、21歳でローマ賞を受賞してローマに留学するなど、若い頃から天才として認められていたフランスの作曲家です。3年間のローマ留学時代にパレストリーナに感銘を受けてポリフォニー作品を研究し、オペラでは「ファウスト」、宗教曲では、「聖セシリアのミサ」などの素晴らしい作品を作曲しました。

「第2ミサ」は、28歳の頃から作曲を始め、36歳の頃完成したと伝えられている男声合唱とオルガンによるミサ曲です。Gloriaの一部を除きホモフォニックで、言葉を大切にしながら美しいメロディーが印象的です。

“Agnus Dei” (神の子羊)

「神の子羊、世の罪を除きたもう主よ。われらに平安をあたえたまえ」と歌う通常ミサ曲の終曲です。教会では平和の賛歌と呼ばれています。

“Domine Salvum Fac” (主よ救いたまえ)

グノーのいくつかのミサ曲においてAgnus Deiの後に挿入されているフランスの教会独特の祈り。

藤野 恵 (オルガン)

京都大学グリークラブ70年度指揮者。教会オルガニスト。マーチで送りだしたカップルは500組を超える。本業は本プログラム編集など、専業制作。

■The Seal Lullaby(アザラシの子守唄)

エリック・ウィテカー(1970-)は、ネバダ大学およびジュリアード音楽院で学んだ米国の作曲家・指揮者で、米国では合唱曲、吹奏楽曲がよく演奏されています。ネット上でのウィテカーの指揮に合わせて個人が歌った世界各国からの投稿ファイルを合成し、ネットで公開している「2000の歌声でつくるバーチャル合唱団」は、世界的な話題になりました。

“The Seal Lullaby”は、2008年にキブリング作「ジャングルブック」アニメ映画化のため、「白いアザラシ」物語の冒頭の詩に作曲したのですが、企画が「カンフーパンダ」に変更になったため、映画では使われませんでした。

「白いアザラシ」物語は、主人公の白アザラシ、コティックが、人間がアザラシを狩るのを見てアザラシだけの土地を求めて旅をするというものです。

曲は、ピアノ伴奏付の美しい子守唄です。あたかも波間に揺れるような3拍子が、眠りについた多くの魂にも心地よく届きますように心をこめて歌います。

■Ubi caritas (慈しみと愛のあるところ)

「ウビ・カリタス」はカトリック教会の「交唱」のひとつで、復活祭前の聖木曜日のミサで歌われる聖歌です。交唱の間に司祭はキリストにならって「慈しみと愛」の証として、12人の信徒の足を洗う儀式を行います。

この作品ではグレゴリオ聖歌原曲の旋律が活かされています。作曲/編曲のオラ・イエイロはノルウェー出身25歳の作曲家でピアニスト。現在ニューヨーク在住。その作品は米国、北欧で広く演奏されています。

■Tarantella (タランテラ)

作詩のヒレア・ペロックによると、この「タランテラ」とは、よく知られたイタリアの同名の舞踊ではなく、スペイン・ビレネー地方に伝わる民俗舞踊ということです。ペロックは英仏両国籍を持つ英国議會議員でした。また優れたエッセイスト・詩人でもあり、子ども向けの詩もたくさん残しています。

この作品からは、葉の音、激しい踊り、酒場の喧噪、そして詩人若き日のアバンチュールの記憶が、いかにもスペインらしい香りを伴って色鮮やかに甦ってきます。頻出するリズムカルな脚韻、頭韻のいるどりも手伝って、多分にこうした趣が醸し出されているのでしょう。例えばこんな風です。

(詩人はアラゴンの安宿の追憶を語ります)

“the fleas that tease in the high Pyrenees”

(ビレネーの山奥であの蚤には閉口したわ)

“the bedding and the spreading of the straw for bedding”

(寝床ときたら藁をひろげて敷くだけという代物さ)

“ting tong tang of the guitar”

(ギターのリズムがタンタラタン)

ランダル・トンプソンは合唱作品では知らぬものなき作曲家です。ハーバードで教鞭もとっていました。当作品でも、フランメンコ風のリズムと和声進行、そして情熱的で越深いピアノ伴奏を駆使して、原詩に宿る魂を堂々と捉えてみせています。

なお、「タランテラ」はハーバード・グリークラブ1961年の演奏旅行で、ここ仙台でも演奏されました。

SINGERS

■京都大学グリークラブOB会

西田 主計 '68	志水 雅一 '77
森田 正紀 '69	長谷川正雄 '77
田中 利男 '70	早雲 孝信 '77
辻本 直彦 '70	山崎 徳和 '78
大木 和夫 '71	新貝 康司 '78
西門 岩全 '71	高野 誠 '78
長尾 源承 '71	西川 文章 '78
濱中 英二 '71	花田俊一郎 '79
小林 謙一 '71	小田垣正則 '79
横井 省吾 '71	横山 充 '80
大橋 恒雄 '72	渡邊 真康 '80
北川 邦晴 '72	大岡 亥行 '82
加門 洋一 '72	谷 信幸 '82
谷垣健一郎 '72	井上 一郎 '82
藤野 恵 '72	津久井信夫 '82
明仁 憲一 '72	平井 恭 '83
林 康秀 '73	棟重 卓三 '83
鈴木 照男 '73	森 一孝 '84
池田 廣平 '73	蓮井 武 '86
毛涯 久 '74	上杉 昌也 '08
西川 誠一 '74	今田 龍介 '12
藤田 正浩 '75	柳沼 昂也 '14
河野 浩 '75	藤貫 裕 '15
三木 善朗 '76	

■Harvard Glee Club Alumni Chorus

Malcolm M. Brown '65
Francis E. Donovan '59
Roy D. Farmer, III - EdM '97
Frederic H. Ford '60
David W. Frank '71
David E. Golan '75
David H. Griesinger '66
James M. Harkless '52
Joseph S. Hayes, Jr. '60
Robert J. Henry '78
Jerry A. Hogan - AM '59, PhD '61
Keith L. Hughes '66
Bernard E. Kreger '59
Terence G. McGinty - MPA '02
Danny R. Moates '59
R. Taggart Murphy '74
David R. Musher '64
Thomas D. Oleson '60
Warren H. Pyle '55
William S. Reardon '68
David A. Rigney '60
Philip S. Sheldon '77
Charles J. Smiler '67
Wasył Szeremeta '84
Charles E. Terry '61
David B. Wellborn '81

■合唱団「萩」

Soprano

飯島真江子
石冢 ミヤ
石丸 育子
伊藤 弘美
伊藤ライム
岩田 破子
小川 信子
川村志津子
菅野 政子
木村 淑子
久保田恵子
小堀 信子
齋藤早百合
佐賀 慶子
佐藤美津子

菅原富美子
杉原 和子
鈴木 昭子
鈴木まゆみ
高橋 弘子
寶 鈴子
田子 京子
平川 敬子
前田千左子
松川田鶴子
水野 純子
宮崎 頼子
山森 貴子
吉田 秋子

Alto

赤崎 節子
浅見永理子
板橋 薫
猪俣 美穂
岡崎 洋子
菅野由美子
楠 真知子
丁藤千鶴子
久保田純子
熊谷 祐子
黒岩 信子
小暮はるみ
斎藤 廣子
末光 泰江
鈴木 勝江

鈴木 陽子
田中 行子
野口 楽子
増井 淳子
山内 弥生
吉村美智子
吉村 玲子

Tenor

赤崎 宏雄
阿部 幹男
黒岩 晃一
小泉 恵一
境田 清隆
末光 眞希
袖山 直也
高橋 正憲
竹井 稔夫
新沼 慎二
蛇口 広行
松川 周

Base

岩井 純一
桜田 忍三
大島 修三
小川 和明
小暮 義雄
清水 広行
杉山 博昭
田口征一郎
水野 達夫
宮城 卓三
我妻 道也

ふるさと

うさぎ追いし かの山
こぶな釣りし かの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき ふるさと

いかにいます 父母
つつが無しや 友垣
雨に風につけても
思い出ずる ふるさと

作詞/高野辰之 作曲/岡野貞一

志を 果たして
いつの日にか 帰らん
山はあおきふるさと
水は清き ふるさと

1. Aobajo Koiuta - a Love Song at the ruins of Aobajo Castle

This song, composed by Muneyuki Sato, a singer-and-a-song-writer in Sendai, became a greatest hit in 1980s. Not few students came to Tohoku University enchanted by this song.

2. Beautiful Name

This song was composed in 1979 to celebrate the International Year of the Child. This lovely song reminds us of smiling faces of children around us.

3. Toku e Ikitai - I want to go far away -

This song was composed in 1962 as a Song of the Month in a NHK's first TV variety show. The sad taste of this song attracted the heart of the people not only in Japan but also in Russia and European countries.

4. Hashiru Umi - Running Sea

The poet Hiroshi Yoshino finds a fragile and ambivalent spirits of young generations in the roaring tides of a winter sea.

5. Taiyo no Hitorigoto - Monologue of the sun

This song was composed in 1977 by a singer-and-a-song-writer Ami Ozaki. She charmingly describes a scene at a harbor, where a young lady strolls around under the sunshine. Please enjoy the bossa-nova touch of the sound.

6. Kazeno yoni Utaga Nagareteita - Songs were flowing like a wind

Another J-pop song by Kazumasa Oda, a very popular singer-and-a-song-writer and a graduate of Tohoku University as well. He recalls how he grew up being surrounded by various kinds of songs.

7. Jangara Festival

Jangara Festival was composed by Mr. Okazaki, our conductor, based on a religious folk dance which is still there in Taira area in Fukushima Prefecture. We present this song, hoping to present a very rhythmical aspect of Japanese folk music.

曲目変更のお知らせ

Harvard Glee Club Alumni Chorus の曲目に一部変更があります。

<i>O Domine Jesu Christe</i> (ああ主イエス・キリスト)	Melchior Franck (1573-1636)
<i>Daemon irrepit callidus</i> (悪魔は言葉巧みに忍び寄る)	György Orbán (b.1947)
<i>Round Around About a Wood</i> (ぐるっと森をひとまわり)	Thomas Morley (1557-1602)
<i>Der Gang zum Liebchen</i> (愛する人に至る道)	Johannes Brahms (1813-1897)
<i>Tu mi vuoi tanto bene</i> (麗しの君)	Italian Folk Song Arr. Archibald T. Davison
<i>Jesus Walked This Lonesome Valley</i> (イエスはこの無人の谷を歩んだ)	William Dawson (1899-1990)
<i>What Shall We Do With The Drunken Sailor?</i> (酔いどれ水夫はいかにせん)	Arr. Robert Shaw, Alice Parker

■ *Tu mi vuoi tanto bene* (麗しの君)

古いイタリア民謡で若者が美しい恋人にプロポーズする内容です。ハーバード・グリークラブ初代指揮者アーチボルド・デイヴィソンの編曲。
